

冬の中国北境を ゆく

志賀和子

’90年同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻
後期課程退学



私は、一九八五年九月から八七年九月までの二年余り、中国の北京に留学した。その間、中国各地を旅行する機会に恵まれたが、特に、自分の研究テーマとの関係もあり、北方地域（内蒙古自治区や東北地方）を訪れることが多かった。

留学に先立つ一九八五年一月に、一人、冬の東北地方を訪れた印象が鮮烈で、留学して初めての冬、やはり単身、北をめざした。一年前は、黒竜江省の省都・哈爾濱^{ハルビン}までであったが、今回はまっすぐ、その奥の齊齊哈爾^{チチハル}に向った。とにかく、まず冬の黒竜江（アムール河）を、この目で見たいと思ったのだ。

北京からチチハルまでは、急行列車でまる一日以上（約二十五時間）かかる。列車は、二等寝台にあたる「硬臥^{ヤウグ}」を利用した。これは、一等寝台にあたる「軟臥^{ナング}」のコンパートメント形式（上下二段寝台向い合わせの個室）とは違い、上中下三段の寝台が、向い合わせにオープン形式で並んでいる。値段も安く、一般の中国人とも交流できるので、私は硬臥を愛用していた。最近、特に女性の場合、防犯面からも好ましいようだ。

黒河へ

チチハルで一泊し、次の日の夜、また列車を乗り継いで、チハルの北東にある北安という所まで行く。夜中の二時すぎに着いて待合室で朝まで待ち、早朝六時のバスで、黒竜江のほとりの町、黒河へ向った。当時は、鉄道はまだ黒河まで開通していなかった。

バスは暖房付きと聞いていたが、寒くてたまらない。本気で、足先が凍傷になるのではないかと思った。通路に一本走っている太い管にスチームが通っているようだったが、全く効き目なかった。九時半頃に、小興安嶺の中にある孫呉という町について、三十分ほど食事休憩。バスから降りたとたん、凍てついてカチカチになった鹿が歩道にころがっているのを目にした。異にかかったのか、足が一本折れていた。バスが何台も停車している。食堂もあり、道路ではいろんな物を売っている。すぐ近くに市場があり、キジのような鳥やウサギなども、そのままころがっていた。さすがに、都市の市場とはちよつと雰囲気

違う。今、剥いだばかりという感じの毛皮を積んだ荷車も通る。考えてみれば当たり前なのだが、毛皮は肉の付いていた方を外側にしていたんであった。一見して、少し意外な感じがしたが、すぐに、なるほどと納得したりした。休憩後は、寒さもしだいにやわらぎ、ウトウトしているうちに、十二時半頃、黒河に着いた。

黒竜江のほとり

黒河では、町の北端にある黒河賓館に泊った。三人部屋で、女性二人（孫呉県の中年の県長さんと、紡績工場の若い人）と同室だった。彼女たちは、会議のために黒河に来ていた。とても感じの良い人たちで楽しかった。ただ、部屋にはバスルームはあったけれど、お湯が出ないので入浴できないのが辛かった。この旅行のあと、ホテルに泊る時は必ず、お風呂は付いているかと聞いた上に、入浴できるかと聞くようになった。

賓館のすぐ後ろが黒竜江で、対岸の町がとても近い。対岸は、当時のソ連・ロシア共和国アムール州の州都ブラゴベシチェンスクである。さすがに黒河よりも大きな町のように工場も多いらしく、煙突からよく煙の出ているのが目についた。黒河はそんなに大きな町ではなく、賓館の近くにはロシア風の木造建築などがあってもおもしろいが、全体としては開拓地という印象を受けた。道路もわずかに中心部が舗装されていただけであった。

黒河に着いた翌日、そこから数十キロ下流にある愛輝（アイグン）までバスで行った。清とロシアが結んだ愛琿条約の舞台となったところである。その後、義和団事件の際に侵入したロシア軍に焼き



冬の黒竜江河畔（アイグン）

払われたが、今は静かな辺境の町（というより集落の感じ）であつた。黒竜江河畔に出てみると、黒河と同様、ベンチなども置いてあり、のんびりとした風情である。最初は国境というこ

とで緊張していたが、なんだか気が抜けてしまった。目の前には氷に閉ざされた黒竜江が静かに横たわっている。人つ子一人いない。私は、その氷の上を歩いてみたいという誘惑にかられてしまった。少しぐらいならいいだろうと、河原から氷上に数歩踏み出したとたん、足元から「パーン！」という破裂音が聞こえた。びっくり仰天して、一瞬、鉄砲で撃たれたのかと思つたが、どこも痛くない。「大丈夫」と一息ついてよく見ると、足元に細い線が張っており、棒状の物がその線に結びつけられている。この線を足で引っ掛けたい。線が引っ張られると、棒状の物が破裂するしかけになっているようだった。爆竹だろうかと思つたが、気が動転していたので確認はしていない。音を聞きつけて、「きつと人が来る」と思い、あわてて提防にかけ上がったが、あたりはしんとしと誰も来ない。ホッとしたが、これに懲りて、以後河原には近づかなかつた。しかし、いったいあれは何だつたのだろう。誰が何のためにあんな仕掛けをこしらえたのか、今もって全くわからない。ところで、この日は寒かつた。後で聞いた話によると、やはり、この辺でも特に寒い日だつたそう。カメラのシャッターを切る間だけでも、素手になることが耐えられなかつた。

黒河も愛輝も、国境の町として想像していたような緊張感がなく、人々も明るい雰囲気だつた。ただ、夜には、賓館のすぐ後ろの黒竜江の氷の上を、サーチライトがひっきりなしに照ら

していた。これを見た時に、やっぱり国境なんだと初めて実感した。

列車で大興安嶺をゆく

黒河からあとは、バスで嫩江^{のんじやう}まで行き、列車を乗りついで海拉尔^{ハイラル}まで出た。バスに乗り込む時には、公安官が中国人の身分証明書と「通行証」を確認していた。黒河は準開放都市だったので、私も「外国人旅行証」を携帯していたが、中国人も「通行証」を必要とするとは、やっぱり国境の町なのだと思つた。

黒河を朝七時半に出発し、嫩江には午後一時前に着いた。夕方、列車で加格達奇^{カカダチ}まで行く。午後十時前到着し、朝の四時半頃まで待合室で待つ。待合室は暖かく、居心地はよかったが、トイレはここでも外だつた。

早朝になって列車に乗り込んだ。後ろの車両に乗つたが、暖房がきいていない。途中、乗つて来る中国人は「寒い！」と言つて、前の車両に移つて行く人が多かつた。（ちなみに、大興安嶺地区の一月の平均気温は零下三十度以下という）。でも、私は一日耐えた。寒いのも辛いが、日本人とわかって集中的に話しかけられる。元気な時は楽しいのだが、疲れている時にはかなり辛い。だからこの時は、寒くてもガラガラの方がよかった。最初のうちは真暗で何も見えない。ほとんど各駅停車なので、乗客も短距離の人が多く、乗つたと思つたら降りていく。ハイラルまで行く人などごくわずかだ。だいたい地元の人で、旅行者らしい人はみかけない。だから一日乗つていても、車内販売



外国人を制止する立て札（満洲里）

など二回あっただけで、お弁当も売りに来ない。

車外の景観は、黒河から小興安嶺を横切った時と同様、平地となだらかな山地が入り交じっている。雪もけっこう多く、平原か河か湿地か判別できない。山といっても、白樺などの落葉樹が多いので、白い山に黒ずんだ木々が生えている様は、まるで針山のようなのである。そして、その山も平地にはさまれているので、全体に明るい感じがして、日本の山のイメージとは異なる。しかし、駅名が「嶺北」「嶺頂」「嶺南」というあたりは、さすがに山の中という感じで、この路線で一番高いところを走っているようだと思っていると、急にトンネルに入った。その後、烏爾旗干ウルチグンという所あたりから大きく開けてくるが、だんだん暗くなって、夜の七時半頃、やっとハイラルに到着した。

草原の町

ハイラルは古くから、遊牧地帯と農耕地帯の交易地である。私が訪れたのは、ちょうど、中国で最大の年中行事・春節（旧正月）の十日ほど前だったので、そのための買い物をする人々で街は賑わっていた。民族服を着た人々を多く見かける。帯を付けた普通のモンゴル服以外に、ちょうちん袖のような袖付けの、かわいいワンピース式の女性の上衣など、初めて実見する服装もいくつがある。その上、店には民族用品も多く、ものめずらしさに目を奪われているすきに、中国製のダウンの上着のポケットに入れていたサイフをすられていた。私にとっては、留学中只一度の経験だったが、全く気づかなかった。

それにしても、ハイラルは単にこのあたりの商業の中心地と

いうよりも、当時、全国的にみても、流通の発達している所のように見えたことは不思議だった。百貨大楼（デパート）の中には、北京の友宜商店（当時の外国人向けデパート）にあるのより、きれいで、品数の豊富なスーパーがあり、驚いた。

ハイルから、鉄道距離で一八六キロ西に位置する満洲里は、ハルビンからの鉄道の終点であり、草原の中の国境の町である。一九世紀末、東清鉄道の起点駅となり市街が建設された。現在の町は駅の北側に主要部分がある。小さな町なので、歩いて行っても、東西南北すぐ町はずれにでる。西のはずれに行くと、「外国人は許可なく越えて出てはならない」と書かれた立て札が、錆びついたままボツンと立っていた。

ここは、この旅行で訪れた中では、風が一番強く冷たかった。列車からみた冬の草原は、雪も吹き飛ばされるのか、ところどころ褐色の大地が見えていた。また、満洲里に列車が到着する前にも、モンゴル語の車内放送があり、いよいよ、草原の町に着いたという気がした。駅の改札を出ると、出迎えの女性が二人「〇〇同志！」と言って近寄って来た。いつも中国人にまちがわれてはいるが、この時はちよつとあわてた。また、帰途について、満洲里発の普通車に乗っていた時、向いの席に座っていたおじさんは、しばらく私と話していて中国語がおかしいと感じ、一瞬の沈黙のあと、こう聞いた。「ところで、あんた、どこの少数民族？」

帰路は、来た時と違い、草原寄りの路線を普通や急行列車の「硬座」（昔の二等車にあたる）を乗り継いで、春節一日前の北京に帰り着いた。真冬の北京が、とても暖かく感じられた。そ

して、厳しい自然と暖かい人々との出会いに感動し、その余韻にひたりながら、すでに、この次は夏の黒竜江を見に行こうと決めていた。

* * *

現在は、ロシアとの国境も開放され、人の往来も盛んで、十年前と状況は一変している。また、機会があれば、近いうちに是非訪ねてみたいと思っているが、あの自然と人々にもう一度会えるであろうか……。

重度障害者との ハワイツアー

横本 勝
(高等学校教諭)

きつかけ

一昨年の十二月、「京都頸髄損傷者連絡会」の例会の席で「私たち重度の障害者も海外旅行をしたいのですが、どこか計画をたててくれませんか」

と言われたのが、この春のハワイツアーの始まりでした。両手を不自由なく動かせる私（注：腰部の脊髄損傷者）が、両手がまったく動かせないか、またはゆっくりとしか動かせない頸髄を損傷した人たちにとつての「夢の海外旅行」のお世話ができるとなれば、私自身がとても幸せだと思いました。

二十八年前に海水浴の飛び込み事故で受傷したSさん（連絡会代表）も、五年前に単車での事故で歩行が不安定になったI君にとつても、国内での旅行は旅先の設備が不備なために安心して行けない。また海外旅行など思いもよらなかったことなので、ジャンボ機にも乗ったことがない。じゃあこの際思いきってアメリカへ行ってみるかという気持ちになったのです。

最初の取り組み

脊髄損傷者が、長時間の旅行をするときに注意しなければならないことは

(一)車イスや機内の座席にずっと座っていると、床ずれになりやすい。

(二)二〜三時間のサイクルで行わなければいけない「排尿作業」を機内でどうするか。

(三)頸髄損傷者は、三十度の炎天下に十五分間もいると高熱が出るおそれがあるので、その対策を考慮しないといけない。

こういった問題を考えながら、どこに行くか――

答はすぐに出ました。「ハワイ！」

アメリカなら道路も建物にもまず段差がない。それにハワイだと、時間的にも七時間弱のフライトで頸損者にも耐えうる時間であること、なによりも気候が温暖、日本語でもなんとかなるだろうなどの理由で、行先は「ハワイ」にしたのです。





マウイ島カフルイ空港にて。写真中央は連絡会代表のSさん。Nさん(左)とKさん(右)

旅行業者三社から見積もりを取り、添乗員つきでマウイ二泊ワイキキ二泊、リフトつきバスでの送迎、二回の豪華なディナーショーも入れ、食事もほとんどつけて一人二十万円の予算をたててくれたN旅行社にお世話になることにしました。

出発する一年前の昨年四月、旅行希望者の「第一回オリエンテーション」を洛南福祉会館で開きました。

電動車イスを利用している人が二名、両手で車イスを操作して自分の力でかろうじて動ける人二名、自由に車イスを動かせる若者、それに私を入れて車イスは合計六名。歩行はできるが速い移動に車イスを使う人が二名。あと十三名が家族などの介助人。そしてホノルル空港で、ロサンゼルスから同志社高校の卒業生一名が「英語ボランティア」というかたちで合流し総勢二十二名の団体になりました。

二、三名のかたを除いて、パスポートを取得するのも初めてで、その申し込み用紙を渡されたときから、すでに心はハワイへ飛んでいるかのような明るい笑い声が出ました。

コンピュータを使つての連絡

Sさんから、マウイとワイキキのホテルで、排便と入浴の介助をしてもらうために、ハワイのC I L (Centers for Independent Living) とどう「生活自立センター」に依頼をしたいのだが、連絡をしてももらえないかと頼まれた私は、さっそくマックでヤフー検索。すると一発でアメリカ本土の「C I L 本部」にたどり着きました。本部に送信したEメールで「ホノルル支部」を教えてもらい、支部長のホワイトクリフさんから

とてもいいねいな返事がすぐに届きました。それからハワイに行き今年の四月までの一年間、彼との交信が続いたのです。

そして四月二日と四日の二回、Sさんは二人のアメリカ人の女性介助人から二時間ずつ介助を受けました。一人一時間二十ドルでしたが、看護婦さんばりの介助であったとSさんは喜んでいました。

身体障害者にとってコンピュータは強力な味方となることを、ハワイツアーの準備段階で身をもって知りました。インターネットが、今回のツアーを大成功に導いたもうひとつの例をお話ししましょう。

実は二度もマウイに行きながら、私はラハイナの港が有名な捕鯨基地であったことを知りませんでした。マウイのホームペー
ージにたどりついたあと、「ホエール・ウォッチング」の部分をクリックしてみても驚きました。

メルヴィルが仕事を求めてラハイナの街をさまよったなどの歴史的なこと、さらにラハイナ港から出る観光船の会社を知り、すぐにEメールしました。

二番目にコンタクトをとった会社とはファックスでやりとりをして、ついにフリータイムの四月二日正午に出航する船に、車イスで観光可能な双胴船を手配してもらったことになったのです。そのうえ料金を四ドルも割引してくれました。

ホエール・ウォッチング

当日はすばらしいハワイ晴れ。

ラハイナの向かいに浮かぶラナイ島にうすい雲がかかっていましたが、風もなく海面が落ち着いていて「ホエール・ウォッチング」には絶好の天気でした。

両手が不自由な重度の頸損者のKさん夫妻とNさん一家が、港での集合の時間に来ないのです。あせりました。

今回のツアーでは「社会参加へのトレーニング」も重要なテーマのひとつであったので、マウイ・マリ奥特ホテルから港までは「自分たちで工夫」して行くことにしていたのです。したがってタクシーなどのお世話はいっさいしませんでした。

結局、その二組のかたはホテルのフロントで「福祉タクシー」を紹介してもらって、出航の五分前に港に到着しました。

長さ二十メートルのカウラナ号に乗船するとき、屈強なハワイの若者が二人がかりで、六人を車イスごとかかえてくれました。また観光船の会社が、日本語を話せるマークというアルバイト青年を配置してくれて、その親切な対応に感激しました。

もともと感動したのは、ずっと遠くにいたくじらが三頭も、私たちの観光船三十メートルくらいまでに近づいて来てくれたことです。

一頭のざとくじらが、いちようの葉のような尾びれを見せながら沈んでゆくとき、その裏側がまっ白だったのがとても印象的でした。

顔や腕が色白のKさんもNさんも、海と太陽からの紫外線をいっぱいにあびて、まっ赤になっていました。その夜、重度障



ホエール・ウォッチングのために観光船に乗りこむ。

害者のかたに高熱などの症状が出なかったことで安心しました。

携帯電話を借りる

そういう最悪の場合を考えて、携帯電話をホノルル空港到着時に二台借り、うち一台は添乗員が持ちました。いざとなれば911へ救急要請の電話をするつもりだったので。

ハワイにいた四日間、幸いにも救急事態はありませんでしたが、実際に使ったのは、CILへの連絡や観光船の会社と、デイナーの予約をしていたレストランへの確認、集合状況のチェックで添乗員との連絡などに大いに威力を発揮してくれました。

実は、京都頸髄損傷者連絡会には強力なサポーターがいます。「京都市ロータリークラブ」のかたがたです。毎年秋、障害者スポーツセンターで開催している「大運動会」では、家族のかたとともに五十名くらいのロータリアンが参加されます。今回のツアーでは、一千ドルもの支援金を提供してくださいました。

こうした理解あるかたがたの善意で、京都頸髄損傷者連絡会のみなさんが旅行などいろいろな活動が可能となりました。このたびのハワイツアーが大成をおさめたのも、ロータリークラブの「奉仕の精神」のおかげでもあると感謝しています。

ワイキキで

ワイキキでは、車イス二組のかたがリムジンを借りきって、

パールハーバーからハナウマ湾などをリッチな気分で見光したと大騒ぎでした。日頃は外出の機会がほとんどないかたがただけに、初めての海外旅行とは思えないほどの大胆な勇氣に、今回の旅行の成果が出ていました。

リージェンシーホテルの二十七階の窓から見るカラカウア大通りやシェラトンホテルなどの夜景がカラフルで、幻想的な映画の世界でした。

レジェンズの歌まねショーが終わったあと、「とり」で歌ったプレスリーのそっくりさんが、八十五歳の女性（注…歩行時のみ車イスを利用）のメンバーに走りよって

「おばあちゃん、待つて！」

と流ちょうな日本語で語りかけて、ステージからお客に投げるぬいぐるみのひとつを特別にプレゼントしたのです。エンターティナーの本当のやさしさを感じました。

心のバリアフリー

やさしさ、といえば――

ラハイナの通りでミニバンのタクシーに乗り込めなくて、妻ともども困っていたときに、後方のレストランから若者のウェイターが飛んで来てくれて

「お手伝いしましょうか」

と言って手を貸してくれたこのさりげない機転に感動しました。

また、ハワイではまったく「人の視線」を感じなかったのです。日本では、気の毒そうな視線や、見てはいけないものを見

てしまった風の視線に出会うことがあります。車イスが「特異なもの」ではないアメリカでは、障害者と目が合ったとき、にっこりほほ笑む自然体が「心のバリアフリーの社会」を生んでいるのでしょうか。

さいごに

Kさんは、大原記念病院に入院中の参加者でした。このハワイツアーの企画を聞いた一年前、

「どうしても行きたい。この機会を逃せば生涯どこにも行けないかもしれない」というまさに必死の気持ちから、主治医の特別許可をとって

参加しました。四月一日病院から出発し、六日に帰国後、病院へ帰って行きました。ハワイへ出発する直前まで、ほんとうは不安で不安でたまらなかったのだと奥さんは言っていました。

四月の末ごろに、できあがったハワイの写真を持ってお見舞いに行ったとき、ハワイ焼けのまださめない彼が、電動車イスのコントローラーを「あご」の先端で動かしながら、私の顔を見るとすぐに言いました。

「横本さん、次はヨーロッパに行きましょうよ！」